

異才発掘プロジェクト ROCKET

文学部 1年 近藤千洋

この国では、「異才」と聞くと一般に「頭が飛び抜けて良く独特の感性を持った天才」というポジティブなイメージと同時に「少しみんなとは違って関わりにくい変人」というネガティブなイメージを抱く人が多いようだ。いわゆる「標準志向」が強いとされる日本社会では、オールマイティーで協調性がある人を理想とする風潮が根強い。そのため、好きな特定分野に対して驚異的な理解力や集中力を示すなど実にユニークな個性を持ちながらも、対人関係が極端に苦手であるなど偏った部分がある子どもたちは学校に馴染めず、その豊かな個性を埋没させてしまいがちだと言われる。

そんな彼らのために学校とは別に新しい学びの場と自由な学びのスタイルを創造しようとする試みが、ROCKET (Room Of Children with Kokorozashi and Extra-ordinary Talents) である。2014年に始まり3期目を迎えた当プロジェクトを牽引する東京大学大学院先端科学技術研究センターというレトロな施設の中に、全国から集まった小中学生約20人の「異端児」たちの「居場所」はある。

ROCKET を立ち上げた中邑賢龍教授は元々体に障害がある人のバリアフリーについての研究をしていたが、もっと幅広い「バリアフリー」に目を向けたとき、学校に馴染めず引きこもりや不登校になってしまった子どもたちの支援を考えるようになったのだそうだ。実はこういう人こそ変わっているけど物凄いポテンシャルを持つ人かもしれないと考えた彼が、「そういう人たちがつぶされない社会を作ろう。」と日本財団と意気投合したところから ROCKET は始まった。

ROCKET は親や学校が扱いに困るような「異端児」を集めているのであって、決して世間に思われているような「英才教育」ではない、と中邑教授は言う。彼らのユニークさを摘み取らないために、彼らの得意分野を集中的に教育するプログラムを取っていないのだ。そのため ROCKET には教科書も制限時間もなく、彼らがそのずば抜けた集中力をもって打ち込む好きなことを認め、見守り、申請があった場合にのみとことん支援するスタンスを貫いている。必要ならただで海外にも行けるし、工作装置など高価なツールを買い与えたり、その分野のトップランナーを紹介したりすることもいとわない。中邑教授は「放っておいても本当の異才は自分の好きなことを突き詰めるから、大切なのは彼らをつぶさないことだ。」と固く信じている。

学校に馴染めない彼らを「異端児」として排除してしまっただけではせっかくの個性は輝きを失ってしまう。「目の前の子どもたちに真剣に向き合い、彼らが個性を最大限に活かして自分の力で生きていける力を身に付けさせたい。それが最終的には彼らが自分らしく堂々と生きられる社会の実現につ

ながるはず。」と中邑教授は意気込む。ROCKET。これは社会にイノベーションを起こすようなユニークな逸材が育つ社会的素地を育むことを目指した、学びの多様性への挑戦だ。突き抜けた子どもたちに応える、最高に突き抜けた「居場所」がそこにはある。